

イエス亡き後、弟子たちは「ユダヤ人を恐れて、自分たちのいる家の戸に鍵をかけて」（19節）いました。イエスの弟子であることが露呈して逮捕されれば、自分達もイエスと同じ様に十字架刑に処せられるはずだと恐れていたのでしょう。しかし、ユダヤ人から逃げようとすればするほど、イエスを裏切り、見捨て、見殺しにしてきたという弟子たちの心の傷は益々深くなっていきます。さらに、彼らは、死んだはずのイエスを見たと言うマグダラのマリアの証言（18節）を耳にしていました。もし、イエスが目の前に現れたら、裏切りが指摘され、裁かれ、滅ぼされてしまうかもしれない…そういう不安や恐怖がさらに彼らを襲います。彼らの心境はまさに四面楚歌、周りが敵だらけで、もはや頼るべきものがない、そんな後悔と孤独と絶望の淵に追い込まれていたに違いありません。だとすれば、出来る事はただ一つ。師を裏切った者同士、弟子達の間で身を固め、家の戸に鍵をかけて閉じこもり、先の全く見えない暗闇の中で生きていくしかありませんでした。

そんな彼らの前に、復活のイエスが現れ、十字架で釘打たれた手と槍で刺されたわき腹とを見せられたと聖書は語ります。本来、弟子達にとって、イエスの十字架の傷跡を見ることは、「なぜ私を見捨て、見殺しにしたのか。お前たちを許さない！」というメッセージになり得るはずでした。しかし、彼らは「主を見て喜んだ」（20節）のです。なぜなら、「あなたがたに平和があるように」（19節）というイエスの祝福の後に、その傷跡を見たからです。それは、傷跡そのままに彼らがイエスの御腕に抱かれ、祝福され、赦されていく喜びでありました。それは、傷跡あってこそで、イエスの痛み苦しみをなかつたことにしてあげるところからは生まれてこないものです。相手から、傷跡そのままに、呪われるのではなく、祝福を祈られ、赦されるという、この意外性の中で、弟子達はイエスから命の息、聖霊を受け、新たに生まれ変わっていきます（3:3）。そしてその赦しの担い手として、「父がわたしをお遣わしになったように、わたしもあなたがたを遣わす」（21節）とイエスは言われるのでした。「私は平和をあなたがたに残し、私の平和を与える。私はこれを世が与えるように与えるのではない」（14:27）とのイエスの言葉が思い起こされます。

とは言え、人を赦すことは簡単ではありません。見返りもなく、孤独で、また、赦すことのできない自分に嘆くこともあるでしょう。そんな一人ひとりに対して、イエスは手とわき腹をお見せになり、一番の良き理解者として、傷跡そのままに私たちを抱き留めておられます。

（文責：望月達朗牧師）

